

蘇芳：スオウ

今年オリンピックイヤー、開催地はリオデジャネイロ、ブラジルの都市である。この「ブラジル」という国名、日本で「スオウ」と呼ばれる赤い染料の採れる木に由来している。

スオウは、「蘇芳」と書かれることが多いが、「朱芳」、「蘇方」とも書かれ、中国の文献では「蘇枋」とみえる（『南方草木状』嵇含（けいがん）著、304年）。マレー諸島などの東南アジア地域の原産で、中国大陸の内地や日本列島には植生しないが、葉や赤色染料として古くから中国や日本列島にもたらされていた。「スオウ」の名称は、マレー語の「Sappang」が、中国で「蘇芳（スパン）」に転じたことに由来しているとされる。

スオウの木は、マメ科の喬木で、学名は *Caesalpinia Sappan* L. であり、赤色染料は、心材や莖に含まれる。日本列島には、すでに飛鳥時代にもたらされており、以降江戸時代に至るまで重要な交易品として「蘇木」（染料の原材料となる心材のこと）の名で多くの文献に記述が認められる。スオウは、ミョウバンを加えれば、比較的簡単に濃い赤色を染めることができ、アルカリ性にして鉄分を加えれば、紫色を染めることができる。そのため、赤色染料としても、紫色染料としても広く使われていたと考えられている。

東南アジアに産するこの木の存在は、ヨーロッパでも13世紀には知られており、「bresil」あるいは「brasil」と記されている。これらの語は、中世ラテン語で燃えている石炭を表す「brasa」から派生しており、つまり、ブラジルは「赤い染料の採れる木」を示していた。染料色素のうちの主要な赤色色素はブラジリン（brazilin）と名付けられている。現在でも、ブラジリンを含む同種の樹木は、総称して brasilwood（ブラジルウッド：赤い木）と呼ばれている。日本の文献資料の中にも、「赤木」、「紅木」といった記述がみられ、蘇木と同義であると考えられている。

ではなぜ「赤い木」がブラジルの国名となったのか。実は、ブラジルにも、スオウに含まれる赤色色素と同じブラジリンを含む樹木が自生している。東南アジアのスオウと同じマメ科の植物で、広くブラジルウッドと呼ばれたり、ペルナンブコ（Pernambuco）といった産地に由来した名称がつけられたりしている。学名は、*Caesalpinia ehinata* Lamarck であり、厳密には東南アジア産のスオウとは異なる。

西暦1500年2月、ペドロ・アルヴァレス・カブラル（Pedro Álvares Cabral）率いる第2回インド遠征隊が南米大陸に漂着した。このとき、遠征隊の中に、海岸付近に生える樹木が、赤色染料の採れる樹木であることに気づいた者たちがいた。この大発見から、この地域は「ブラジル」と名づけられ、それまで東南アジア地域から輸入していた「赤い木」の新たな供給地となった。

現在、これらの赤い木は、赤色染料としては流通していないが、先のペルナンブコ産のものは、ヴァイオリンなど、弦楽器の弓材として珍重されている。これは、発見から200年以上を経た18世紀後半、フランス人の弓職人フランソワ・タート（François Tourte）

がペルナンブコの木で弓を作ったことによる。ペルナンブコ製の弓は、振動が減衰しにくく音がよく響くそうだ。興味深いことに、色素成分を抜いてしまうと、振動が減衰しにくいという特質も失われてしまうらしい。南米大陸発見以降、ペルナンブコは、染料として、また後には弓材として無計画に伐採されたことが原因となり、産出量が減少、輸出入が制限されている。東南アジア産のスオウは使われないのか不思議に思ったが、幹が細く弓材としては不適切とのこと。

さて、ペルナンブコから採れる赤色染料は、ヨーロッパの南米大陸発見以前から、原住民によっても利用されていた。9～10世紀頃に栄えたシルクロード沿いの遺跡からもスオウで染められた染織布が出土している。日本では、化学分析の実例は報告されていないものの、多くの史料や源氏物語などに代表される古典文学に表れていることから、スオウの存在がうかがえる。形が違っていても、お互いの交流以前から、地球規模で同じ赤色色素が使われていたのである。

[参考文献]

朝日新聞社編：『染めの事典：風土を映す人の技』（シリーズ・染織の文化，1）、朝日新聞社、1985.2.

朝日新聞社編：『染織の道：文明交差の回廊』（シリーズ・染織の文化，4）、朝日新聞社、1985.8.

上村六郎：『日本上代染草考』、大岡山書店、1934、pp.169-171

上村六郎：『東方染色文化の研究』、第一書房、1933、pp.90-94

<http://www.geocities.jp/katsuragiphil/bow/index/index.html>（最終アクセス：2016年6月12日）

松永 正弘．“弘法も弓は選ぶーヴァイオリン”．ウッディライフを楽しむ101のヒント．社団法人日本林業技術協会．p.106-107（2001）．

<http://www.jafta-library.com/pdf/bts026.pdf>

Judith H. Hofenk de Graaff: The colourful past: origins, chemistry and identification of natural dyestuffs. Abegg-Stiftung, Archetype, 2004, pp.141-143.

Dominique Cardon : Natural dyes: sources, tradition, technology and science. Archetype, 2007, pp.275-278.

（文責：島津美子 国立歴史民俗博物館）